

〔大島特産園芸作物における生産振興技術対策〕

アシタバ等の野菜および花き観葉植物の病害虫管理技術
～ツバキの子房を食害するスギタニモンキリガの大島における発生生態～

大根田順子・竹内浩二*・齊藤聖子
(島しょセ大島) *現農総研

【要 約】スギタニモンキリガのツバキ花蕾基部への産卵は、大島では12月初旬に始まり、3月まで継続的に認められる。孵化は12月上旬に始まり、幼虫は4月中旬以降、樹上ではみられなくなるが、その後4月下旬まで落花内で中～老齢幼虫が認められる。

【目 的】

スギタニモンキリガはヤガ科キリガ亜科に属する日本固有種で、本州、四国、九州などに分布する。幼虫はツバキ、チャの花を食べることで知られ、ツバキハナムシと呼ばれることがある(図1)。しかしながら、油糧用ツバキの害虫としての報告はなく、実態は不明なことが多い。近年、被害が目立つなど生産者などから問い合わせの多い大島における本種の発生状況、生態を明らかにして、防除対策を講じる。

【方 法】

大島町内のツバキ生産圃場、公園、街路樹3地点について、定点調査を行った。産卵開始時期を把握するため、1人あたり10個のツバキ花(蕾)への産卵数、孵化の有無および各数量をカウントした。幼虫による被害については、花卉や子房の食害、樹上および落花の内部に生息する幼虫数を調査した。前年は、調査を開始した12月中旬にはすでに産卵が確認されたため、今年度は11月から開始した。調査は、1週間おきに毎回4名以上で実施した。

【成果の概要】

1. 卵および幼虫の発生：12月1日に、蕾の基部に卵が産みつけられているのを確認した(図2)。前年の2月まで未孵化卵は確認されなかったが、本年は2月以降も未孵化卵が認められ、孵化後の殻は2月末まで、未孵化卵は3月上旬まで確認された。幼虫は、樹上の花内からは4月中旬には確認されなくなったが、同じ時期、落花中では生息率が14.2%と増加した。その後減少傾向となったものの、下旬まで確認された。
2. 花と子房の被害状況：食害の発生は、調査を開始した4月2日、花では34.2%、子房では12.5%で認められ、さらに早い時期から発生していたと考えられる(図3)。
3. まとめ：2014年1月から概ね3年間の調査の結果、スギタニモンキリガ雌成虫によるツバキ花蕾基部への産卵は、12月に始まり3月まで継続的に認められた。幼虫の孵化は12月上旬に始まるが、食害被害は2月以降に顕在化し、4月上旬に最も多くなった。幼虫は4月中旬には樹上でみられなくなるが、地上の落花内で4月下旬まで確認された。

現状で防除対策は、花卉の食入痕や雄ずい、雌ずいの食害を目印に幼虫を見つけ捕殺することと、次世代の発生を低減させるための、落花の適切な処分である。成虫の飛来防止や誘殺、産卵防止など、引き続き防除法の検討を行う。

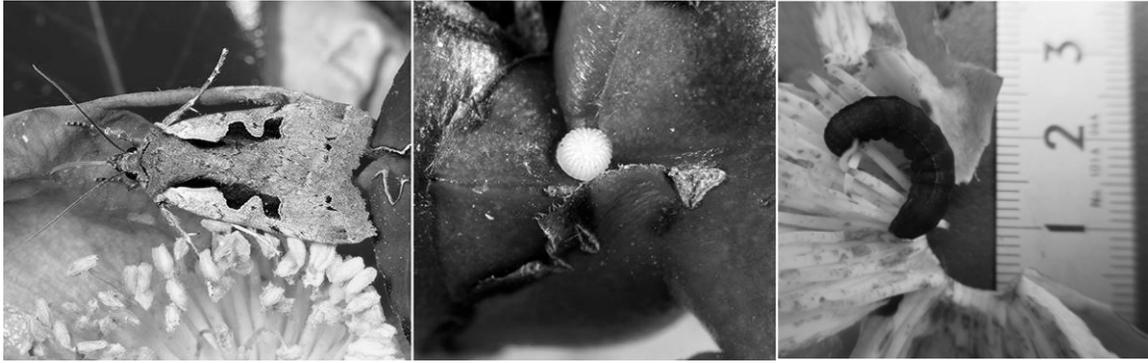


図1 スギタニモンキリガ (左から成虫, 卵, 中齢幼虫)
(成虫の前翅長約 18mm, 卵の直径約 0.7mm)

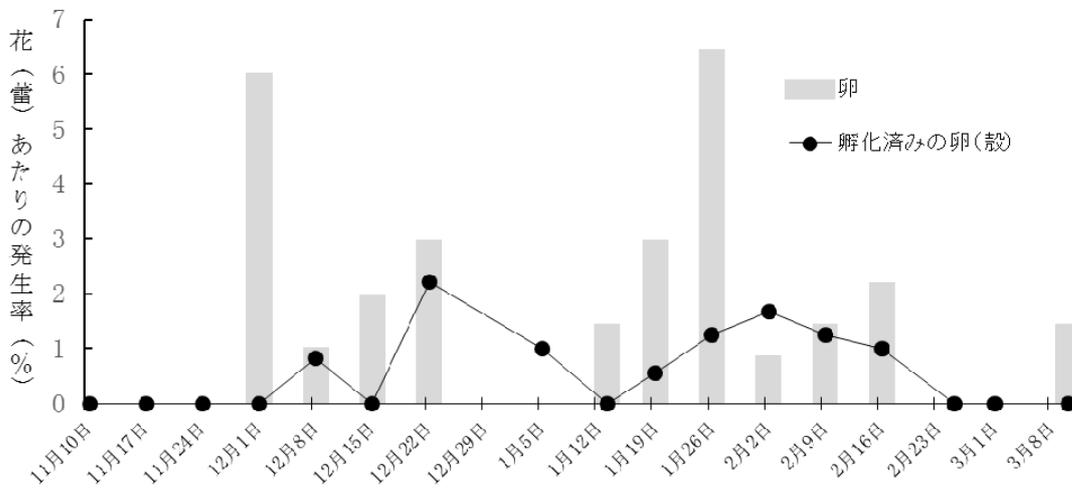


図2 ツバキにおけるスギタニモンキリガの発生状況(大島, 2015~16年)

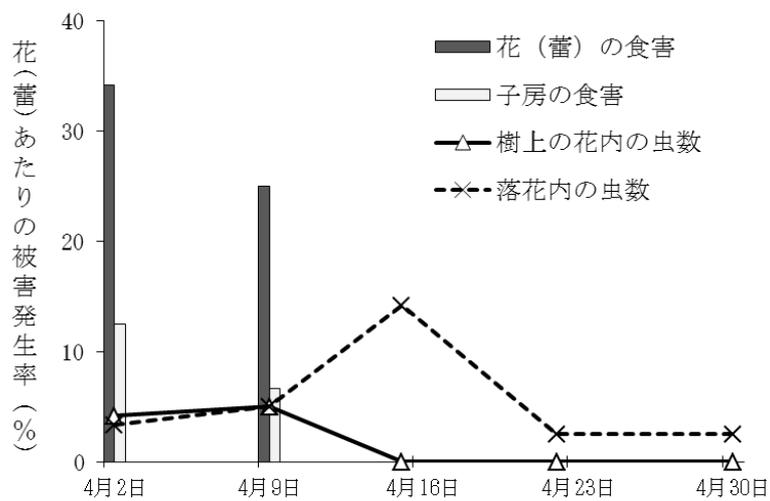


図3 スギタニモンキリガによるツバキの花および子房への食入被害発生状況
(大島, 2016年)